（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	彭　宇潔
論文題目	An Anthropological Study on the Tattoo Practice among the Baka Hunter-Gatherers in Southeastern Cameroon（カメルーン東南部に暮らす狩猟採集民バカにおける刺青実践に関する人類学的研究）		

（論文内容の要旨）

本論文は、カメルーン東南部に居住する狩猟採集民バカの、刺青を中心とする身体加工の実践を人類学的に分析したものである。

第1章ではまず、アルフレッド・クローバー、テレンス・ターナー、アルフレッド・ジェルらの業績を中心に、これまでの人類学における刺青研究のレビューがおこなわれる。それらの先行研究では、刺青のもつ象徴的・社会的意味が議論の中心となっている。しかし、彭氏が初めてバカの刺青に出会ったときのエピソードは、先行研究における刺青のイメージとはかけ離れたものであった。女性の顔にかなり無秩序に配置された瘢痕様の刺青はそれほど美しく見えず、刺青の下書きを描いても「明日」と言いながらいつまでたっても実際の作業に入らない、といった様子だったのである。ここで生じた「バカたちにとって刺青とは何なのか」という問いが、本研究を貫く中心的な問題意識となっている。この問いに答えるために、彭氏は二つの研究方法を採用した。一つは広域調査であり、自動車道路沿いに点在するバカの集落を数百キロメートルにわたって踏査し、1000人以上のバカから当人の刺青についてのデータを集めた。もう一つは特定の集落に定住しての定点調査であり、そこで刺青に関わる実践をめぐる相互行為および会話についての詳細な記録をおこなった。

第2章では、刺青を含めたバカの身体加工の全体像が示された後、刺青の施術方法とその様式が紹介される。刺青の様式は、いくつかのごく単純なパターンの組み合わせであった。次いで、身体加工が性-年齢によってどのように異なってほどこされているかが分析され、実際に刺青を入れる場面の会話が記述される。その結果、刺青は圧倒的に女性に多く見られ、女性の成熟のイメージと重ねて捉えられる傾向があるが、しかしそこでは「入れられた刺青」よりも、それを「入れる」という実践行為そのものに高い価値がおかれていることが明らかになった。

第3章では、刺青を「彫る人」と「彫られる人」がどういう関係にあるのかが、親族関係、居住地域、社会組織の視点から分析されている。その結果、刺青のパターンはバカのリニージや居住地域、さらには隣接するバントゥー系民族とはほとんど相関しないことが明らかになった。また彼らの社会には専門的な「彫り師」もおらず、彫る人と彫られる人はほとんどの場合、近い親族関係にある。実際の施術場面を見ると、施術は何の前触れもなく始まり、また刺青のデザインは彫るプロセスにおいて、施術に立ち会っている人々の意見で次々と変わっていくことが明らかにされた。

第4章では、バカたちがどのように刺青をイメージし、記憶しているかが分析される。注目されたのは、バカの女性たちが、施術時およびその後において、自分の刺青を見るために鏡を使わないという現象である。また、体に残った刺青は、年寄りにおいてははっきりと認められなくなっていることも多いが、彼女たちは、それが「彫られた」ことは記憶していて

も、実際に見えなくなっていることはほとんど意識していない。つまり、彼女らにとっての刺青は、他人に見せるためというよりは、それを一緒に入れ、他の人たちと同じようになるためにあるのだ、と分析されている。

第5章では、ここまでの分析が以下のようにまとめられる。

1）バカ社会における刺青実践は、社会的な共在がベースとなっており、たいしたきっかけもなく、臨機応変におこなわれる。

2）そこで志向されているいるのは、個人間やグループ間の境界を作ることではなく、身体の外見において他者と融合することである。

3）バカの美意識は、「今」への高い関心に基づいており、それは物理的外見ではなく、記憶の中に保存される。

このように、バカの刺青実践には彼らの「狩猟採集民性」とでも言うべき特徴が表出されており、それは彼らの社会の相互作用の中で、継続的に再生産されていると結論づけられている。